

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

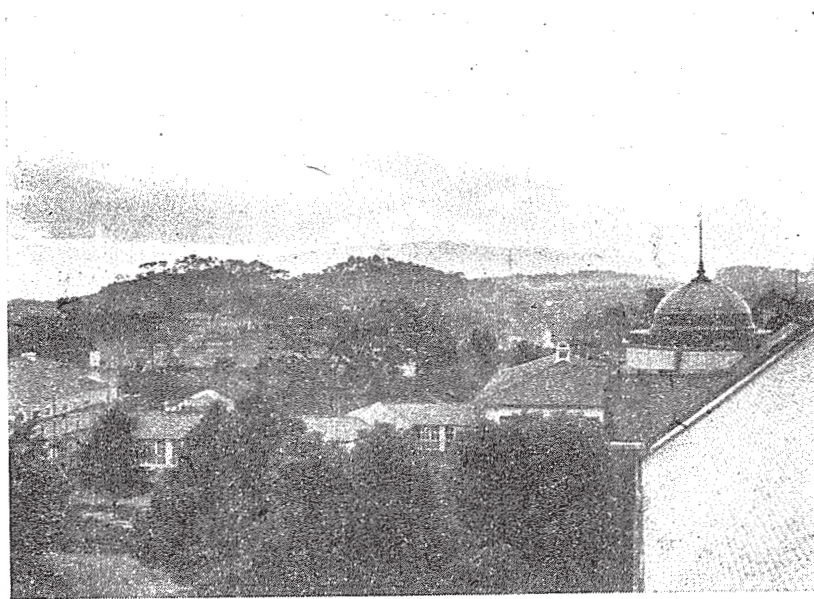
Osaka, November 15th, 1951. —No. 244

關西大學學報

第 2 4 4 號

昭和 2 6 年 1 1 月

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
復刊第一四号（通卷第二四四号）
昭和二十六年十一月十五日發行（毎月一回十五日發行）



千里山學舎の新装

Deux choses sont nécessaires aux jeunes gens : l'intelligence
du passé et la passion de l'avenir.

Il ne suffit pas de connaître le passé, il faut le comprendre,
et pour comprendre il est nécessaire de composer.

L'avenir n'est intéressant que si l'on se rend compte qu'il a
un sens : que nous sommes engagés dans une histoire dont
l'auteur sait ce qu'il veut et qui a besoin de notre colla-
boration. Cet auteur qui dirige le rassemblement de l'
Humanité entière dans un unique amour est Christ qui a
dit : Voici que je fais toutes choses nouvelles.

— Clara —

Bruxelles, 27 septembre 1951

関西大学の学生諸君に

青年には二つのことが必要である、その一は過去についての
智識であり、その二は未来に対する情熱である。

過去は、ただそれを知るだけでは充分でなく、それを理解し
なければならぬ、そして理解するには比較することが必要で
ある。

未来はそれに意義目的のあることを認識する時、はじめてそ
れに対する関心の高まるものである。即ち吾々は実に一つの歴
史に参加してゐるのであつて、その歴史の作者はみづから欲す
るところを爲し得るも、しかも又吾々の協力を求めてゐるので
ある。かくして全人類を唯一の愛のうちに結合せんとするその
作者は

「視よ、われすべてのものを新にするなり」(ヨハネ黙示録
第二十一章第五節)

と言ひたまひし神なのである。

一九五一年九月二十七日 佛國ブランクにて

ポール・クロードル

哲学への期待

大小島眞二

哲学へ究極に期待されることは、現実の哲学の在り方がどのようなものであろうとも、或はそれが儚ない希望であらうとも、哲学は我々に世界の謎、並びに人生の意義を開明することである。そしてそれは我々が世界でなく、世界が我々を所有するのであることを明かにすべきである。それは出発点に於て人間中心であるが、その目的に於ては超越的でないならばならぬ。睿智の興える最後の結論に達したと信じて自負するのでなく、世界の謎は驚嘆すべきものであり、その各の解決の試論は、それが愈々謎に満ちてゐることを確めるに過ぎないことを示すものである。我々の直面する状況は、多年の精神的挫折の後に、又比類を絶した経済的窮乏の最中であつて、各分野で我々に強い自覚を要求している。哲学はもとよりパンを造り出すものでないが、然し崩壊したあらゆる文化財の再建の力と意志を生ぜしめる内的更新に対する精神的、心情的前提の主要部分を提供する。我々の置かれたる環境の物質的、精神的、如何程激しくならうとも、愈々強く精神の抵抗力と創造力が促進されねばならぬ。激動期に於ける新しき哲学はあくまで自由で、そして人間の行動意志の自由と責任の確立を促進するものでなければならぬ。従つて新しき哲学は、人生の側面で、或はそれを超えて傍観するものでなく、世界にある人間存在そのものを究め、且導くものでなければならぬ。

さて人間存在を含めて世界の存在の謎を、暗号—シンフル (Chiffre) として捉へることは根源的な哲学

的思想であるとヤスバースは説いている。ハイデッガーも云つてゐる如く、フロソフイアなる語が未だなくして、而もその本質が把握されてゐたギリシャのソクラテス以前の宇宙論期に於て、このことは強く現われていた。然しそこでは方法的には意識されなかつた。偉大なるどの哲学にもその特徴は現れてゐる。然し各時代の哲学的思索に於て、所謂、暗号から一面的に純粹概念へ脱落して行つてゐる。そして思惟に於いて存在の現実を捕捉することは、唯單なる思惟となり、かくて哲学は偽装の科学となつてゐる。哲学するものがなされねばならぬことは、思想の新しい所謂、暗号の書を持來することによつて存在の暗号の書を読むことである。存在の謎は暗号のシンボルを通して展開され、超越的な根源の思惟活動のあらゆる仕方を通して、形式に於て、原型に於て、理念に於て現われる。このシンボルの言語を明確化することは哲学的な思惟の最高の能力であるとされる。

哲学するとは存在一般についての意識への着手と導入である。このことは哲学することの全体に於て始めてそこに完成されるのであつて、個々の思惟によつてではない。又思惟作用と共に完成される内的行爲によつて行われるので、かゝる思惟のみによつてではない。かくて哲学に対する期待に於て、ヤスバースの哲学的論理學第一巻たる「眞理について」(Von der Wahrheit 1947) の一〇五四頁の長大に過ぎる著作の次の如き最後の句の意味が、改めて我々に再吟味を迫るのである。

「哲学は最も外なるものを体験すべく覚醒させ、注意を喚起し、その道を指示し、ある距離の前進を指導し、準備させ、その体験を成熟させる。」(一九五一、一〇・三〇) (文庫部教授)

第二四四号 目次

表紙写真	八島教授撮
詩人クロードルから本学学生へ	(一)
哲学への期待	大小島眞二(三)
ルイ十四世の一日	三木 治(四)
学内報	(五)
東洋文学科創設記念講演会	國文学講演会
エリセーフ氏來學	関西哲学会
定例評議員会	大学祭
一高一中体育祭	天野氏表彰
日本私法学会	一中創立五周年祝賀式
英語學講演会	人事異動
校友	(七)
府下在職教職員秀麗会	泉南支部秋季総会
千里山昭八会	昭六会
學生	(八)
海外彙報	(九)
海外學界談柄	T・M 生(一〇)
河豚談義	鐙方 貞亮(一一)
趣味の頁	(一二)
エリセーフ氏の横顔	(一三)
校友各位に望む	(一四)
編輯後記	(一五)
圖書館新着洋書目録	(一六)

ルイ十四世の一日

三 木 治

もうずつと以前に中央公論が改造かに浅野長勳侯が「殿様の生活」を披露した記事が載つてゐたことがあつた。吾々しもじもにはずぶん不自由な暮しだなどとの記憶が残つてゐる。では王中の王と呼ばれ、専制政治の権化のやうに思はれてゐるルイ十四世はどんな日常を過したであらうか。これをサン・シモンの「メモワール」と彼の研究家アンドレ・ル・ブルトンの「サン・シモンの人間喜劇」から引出してみよう。

朝八時まへ、厚いカーテンの垂れた部屋はまだ薄暗く、あたりは音もない。その丸窓の形から通称「牛の眼」と呼ばれてゐる控え間に續く私室にはルイ王が眠つてゐる。ナイト・キヤップをかぶつて。(髪をつけてゐないルイ十四世などフランス人にとつては、ちやうど吾々に大黒頭巾をぬいでゐる大黒さんを想像させようとすると同様に想像し難からうが、事實は仕方がない。)八時、同じ部屋に寝てゐた侍童頭が靜かに服を着終つて、「陛下、お時間です、」と言ふ。そして控え間の戸を開ける。同時に内科の侍候頭と外科の侍候頭が侍童を従へてはいつて來て、王をマツサージし、ことに晩年汗かきになつた王にシャツを着かへさせる。乳母が生きてゐた間は彼女も一緒にこの時部屋にはいつてきて王を抱擁する。

八時十五分、侍従長が呼ばれ、彼と共に「大伺候」がはじまる。これは王弟、王子たち、二三の元帥に限

られた小人数である。彼らはその部屋を仕切つてゐる金色の手摺の外に居並ぶ。

侍従長が寢台のカーテンを開け、王に聖水と聖靈詠の書を捧げる。「大伺候」の人々はこのとき別室に移り、王が短かいこの祈禱書を読むのを待つて以前の位置にもどる。侍従長が部屋前を捧げてゐる間に「第二伺候」が呼入れられる。これは王の四人の秘書と二人の進講者(その一人がある時はラシーヌだつた)と数人の特に寵愛を蒙つてゐる貴族とに限られてゐる。續いて側近に仕へる者の「側近の伺候」があり、最後に控え間でそれまで待つてゐた「一同の伺候」が行はれて、彼らは靴を穿きつゝある王を見る光榮にあづかる。もつとも「一同」と言つてもこれもなかなか得難い恩寵で、しばしば延臣たちの争ひの種となつたもの。この時の伺候を指すのである。二日に一度王は髭を剃らせる。そして伺候が始まる前に既に小さい冠をつけてゐた。王はたとへ病の床に於ても公衆の前では冠を脱いでゐたことではない。そこへ二三種の大冠が運ばれる。王は自らそれを選択する。かくして彼は一日に数回冠を變へるのである。

さて王は服を着終つた。立上つたルイ十四世は立派だつた。背は高く、四肢は種々な鍔鍔によつて均整よく発達し、王の最も可愛がつた王孫妃ブルゴーニュ公爵夫人など彼と並んでは、「まるでポケットから出て

ゐるのかと思はれる」ほどだつた。この堂々たる体軀の上には、美しい額、濃い眉、灰緑色の瞳を持つた射るやうな眼、やゝ小鼻のいかつた大きな鷹鼻、それに殊に晩年齒を失つてからは下唇がすこし上唇にかぶさつてゐる軽度するやうな口を持つた顔がつてゐた。そして延臣たちは、否、王子や王孫たちさへ悉くが彼の前に慄へてゐたのである。ただし彼は顔も洗はず、口も漱がなかつたらしい。ある文獻に起床の際に侍童が一、二滴アルコールを掌に落したとある以外に、顔を洗ふルイ十四世などとはどんな書物にもないとのことである。

着付け終ると、王は寢台の傍に跪いて祈り、列席の僧たちも跪くが、他は立つてゐる。やがて王は一同を従へて会議室である大書院に赴き、一行はそこに王と二三の寵臣を残して速かに去る。會議がしばらく續く。だがやがてミサの鐘が鳴り始める。王は會議室を出て、礼拝堂に歩を運ぶ。従ふ者もこの道中では、彼に話しかけることを許されてゐる。王が貴賓席の中央に跪くと、全王家悉くそのうしろに居流れる。ミサが終るまで王の姿勢は変らず、また彼は生涯にたゞ一度、即ち戦争中の大行軍の時を除いてはミサを缺かしたことはなかつた。

ミサは終り、婦りの道すぢも同じく、話しかける許可も前に同じ。帰還を待つて會議が始まる。たゞし一般拜謁の日である木曜日と、告白體問僧の日である金曜日とを除いて、時にはミサと會議との間に特別拜謁の機会が與へられることもある。會議の開始と共に一般の延臣らは場を散じ、それぞれ自己の営みに急ぐ。かくして朝の行事は終るのである。

會議ははてた。午後一時、晝食の時間である。晝食はいつも王の私室ですゝめられる「小膳立」であ

る、即ちもし王弟でも来あはさなければ王一人が食卓につき、王子、王様が奉仕する食事である。卓上には彼のナイフや匙と共に、毒味用の鍍金した銀杯を入れた小函が置かれてゐた。彼は大食漢だつた。したがって王の節食を願ふ侍臣フアゴンと大膳職との間にはいざこざが絶えなかつた。飲み物としてはブルゴーニュの葡萄酒を半ば水で割つたものしか用ひず、決して他の酒類、コーヒ、茶、テヨコレートなどは嗜まなかつた。

食事が終ると、小書院に進み、そこで短い拜謁を許し、ついでポケットに堅いビスケツトをつめて犬どもを見に行く。そして服を着かへ、髪を束へて大理石の中庭に降りてゆく。

散歩の時間が来た。王は戸外の空氣が極めて好きだつた。かつて余りに濫用した香水に基因すると彼の言ふ頭痛に対する唯一の療法と思つてゐた。それゆゑ炎える太陽も雨も風も彼の外出を妨げなかつた。散歩はある時は庭園の散策、馬車での遊出、あるひは狩獵のこともあつた。狩獵の際には彼は巧みに馬を乗り廻し、あるひは四頭の小さい馬が曳く輕車を自ら操つた。また六頭乃至八頭の馬が曳く赤塗の馬車が王と他に五人の貴婦人を乗せて、トリフノン、マルリー、時にはフオンテンヌブローまでも駆け付けて行くことも珍らしくはなかつた。

夕方、還御あつて、服を脱へ、およそ一時間ほど寵臣たち（殊に晩年はさきの寵姫ド・モンテスパン夫人の二人の息子がさうであつた）と書院で話し、それから部屋つゞきのド・マントノン夫人の部屋に渡る。

しかし彼はたとへ寵姫の室にはいつても、あくまで專制的で利己主義だつた。外氣の好きな彼は部屋には

いるや、直ちに一切の窓を開けさせる、たとへ夫人が発熱し、惡寒にふるへてゐる時でも。

夜、十時、王は夫人の部屋から出て来る。晚餐が報じられる。

グラン・クヰツェル

晚餐は常に「大膳立」であり、王の私室か第一の控え間かで、王弟、王弟妃、王子、王孫と共に卓を開き、多数の廷臣、貴婦人が部屋に充満する。「大膳立」は一般の拜謁も許されてをり、時にはバリーからわざわざザニルサイユへ王家の食事を見に来る勳次馬もあつた。しかし食事はもしそこに王の道化師でもない限り、始めから終りまで「死の沈黙」のうちにけはれる。たゞ一回、サン・シモンの経験では例外があつた。それは一七〇一年の一月六日（主顯節）だつた。王の眼の上の瞼であつたさきの陸軍大臣ルウヴオアの嗣子の死が報ぜられたのである。王はこの吉報にこらへ得ず、咽をうたひ始め、匙とフォークとで皿をたたき、一同にも見習ふやうに命じ、この馬鹿騒ぎが食事の間ちう續いたとのことである。

食事がすむと王は手摺を背にしてしばし佇立する。その前に居合せた婦人たちは半円を作つて一礼する。王は婦人たちの「衣裳や、態度や、挨拶の優雅さを見て」たのしみ、列席の王族たちと私語し、それから右に、ついで左に婦人たちへ答礼し、さらに出てゆきがけに「比肩するものもない優美さと威嚴を以て」二度会釈して部屋を去る。

ついで一時間ほど書院で家族たちと話し、それからもう一度犬にビスケツトを與へて、王妃たちと夜の挨拶を交し、私室にもどる。祈禱、着がへの後に、退出してゆく廷臣らになづきつゝ答礼する。そして小御廳が始まる。もうそこには「大伺候」と「第二伺候」の

者しか残らない。しかし数分の後、王が寢台に入りはじめるや、一同は退出する。やうやく彼は一人になる、そしておもむろに髪を脱いで、ナイト・キャップをかぶるのである。

これがルイ十四世の一日であり、彼が終生送りつづけた平常である。ただ背景だけは、離宮での滞在などのために変ることばあつたし、寵姫も三四度は変つたけれども。しかし「暦と時計とがあれば三百里離れてゐても王がいま何をしてゐるかを正確に言ふことができる」とサン・シモンの言つてゐる如く舞台は變らうとも俳優の仕草は常に同じである。しかも彼はこの仕草を壯年の頃や平穩な時だけに限つたのではなく、晩年に彼の身辺を襲つた数々の不幸、不思議な病が王嗣、王孫妃、王孫を相ついで奪ひ去つた時に於ても彼の日常は變らず、一七一五年九月一日に七十七才を以て世を去る二週間ほど前の八月十三日にも最後の「大膳立」の食事をなし、十四日には最後のミサに参列し、廿五日には婦人に謁見を許し、音楽に耳を傾けてゐる、そしていよいよ死の三四日前、宮廷一同にいとまを告げ、未だほんの子供であつた亡き王孫のその嗣子に後事を托す言葉のなかで、彼は思はず「さきに自分が王であつた時……」との感慨を洩してゐる。即ち彼の一生は「王である」との自覚によつて終始した。その好戦癖と建築愛好癖によつて庶民を甚だしく苦しめたことは、その利己主義、專制癖と共に大いに批判に値しようが、この王たる自覚による生活の規則正しさは吾々愈々者にとつては「王者たることまた難いかな」の感を深からしめるものである。（文學部教授）

學内報

東洋文藝科創設記念講演會

十月七日午後一時より千里山學舎大學講堂に於て、昭和二十六年新設せられた東洋文藝科の創設記念講演會が催され盛會であつた。尙別室に於て藤澤泊園文庫の展覧を行つた。講演者並びに演題左の通り

戦後に於ける欧米の支那學界

沈水について 文部省顧問官 櫻 保孝氏

東洋學の使命 東京大學教授 加藤 常賢氏

名古屋大學教授 武内 義雄氏

國文學講演會

十月九日午後二時より千里山學舎大學院に於て國文學會主催の下に國文學講演會を開催した。講演者及び講演題目左の通り

作家と作品

北海道大学教授 風景景次郎氏

エリセーフ氏來學

十月十日午後二時半東京日佛會館々長ヴァン・エリセーフ氏が神戸駐在佛領事クラメル氏と同伴にて來學、東西學術研究所、圖書館並びに進工中の大學院研究室などを巡覽、後以文館に於て理事長を初め、末永、石浜兩教授外考

古學關係の諸教授と懇談した。因にエリセーフ氏は東洋考古學の研究者であり、同氏の父君は現在米國ハーバード大學東洋學術研究所々長であり、父子共に東洋通である。(写真は朝日新聞社提供)



左よりエリセーフ氏、宮島理事、クラメル領事

關西哲學會開催

十月二十七、八の両日に亘り千里山學舎に於て關西哲學會秋季大學を開催、大學院に於て研究発表並に質疑応答を行い第二日午後註商學舎大講堂に於て、公開講演會を開いた。

定例評議員會開催

十月三十日午後四時より千里山大學院學舎に於て寄附行爲第十九條に依り定例評議員會を開催。

大學祭舉行

十月二十、二十一の両日千里山學舎に於て大學祭を舉行。

一高中體育祭舉行

十月十九日並びに十一月四日千里山大學外苑第一グラウンドに於て第一高等學校並びに第一中學校體育祭を夫々舉行。

天野敬太郎氏表彰

本學圖書館職員天野敬太郎氏は十月十日東京に於て開催せられた日本圖書館協會六十年記念式典に際し、全國圖書館界に功勞のあつた者として日本圖書館協會より表彰を受けた。

日本私法學會開催

十一月二、三の両日に亘り千里山學舎に於て日本私法學會第八回大會を開催、第一日は部會、公開講演會を行い、第二日は一般報告及び部會討論の結果報告を行った。

一中創立五周年祝賀式典舉行

十一月三日天六學舎大講堂に於て、一中創立五周年(関甲創立以來四十周年)の創立記念祝賀式典を舉行

英語學講演會開催

東京大學教授河三喜博士を十一月五日千里山學舎大學院に招いて英語學講演會を開催、「忘れ得ぬ人々」なる題下に講演をせられた。

人事異動

助教 小野 勇
助教 見次 直雄

十月二十五日付を以て本學教授に任じ文學部勤務を命ずる

教授學會出席

◆中井駿二教授 十月五・六・七・八の四日間亘り東京電報通信社に於て開催の日本新聞學會に出席、同六日東京朝日新聞社講堂に於て開催の新聞週間記念新聞學術講演會に出席、「世論形成力としての新聞」なる題下に講演、同二十日京都同志社大學に於て開催の新聞學術講演會に出席。

◆安田信一教授 十月六日關西大學千里山學舎以文館に於て開催の金融學會關西部會に出席「貨幣本質の動態論的考察」なる題下に報告を行つた。

◆松原藤由教授 十月十一日より同十三日まで宝塚莊及び奈良縣商工會議所に於て日本學術振興會中小企業委員會主催の中小企業の本質論研究會に出席。

◆松原藤山、植野都太教授 十月二十七、八、九の三日間に亘り東京慶應義塾大學に於て開催の日本経営學會第二十四回大會に出席。

◆岡野留次郎學長 十月三十一日より十一月二日まで東京文部省に於ける大學設置審議會に二十六年新設大學増設學科書類審査の爲出席。

◆飯田正一教授 十一月三、四の両日に亘り奈良縣丹波市町天理大學に於て開催の俳文學會總會並びに研究會に出席「來山の集について」の研究発表を行つた。

校 友

府下在職教職員秀麗會結成

十月七日天六学舎校友会館に於て、予てから要望されていた大阪府下在職教職員同窓会の結成を見た。秋季体育祭、文化祭の催されている学校も多々あつたにも拘らず出席者四十七名、本学より岡野学長、安井校友課長出席。午後二時半南陵中学岩崎氏司会の下に開会、工芸高校末木氏発起人を代表して創立経過を報告續いて議事に入り会名を秀麗會と命名し会長は神保敏男氏(都島工業高校)、副会長は戸川一雄(浪華西中学校)、四辻詮(関西大学第一高校)の両氏と決定。議事終了後岡野学長の祝辭、安井校友課長の挨拶などあり、續いて出席者全員交々立つてテーブル・スピーチを行い、四方山の話を華を咲かせた。それより宴に入り各自御自慢の隠し芸に秋の夜の更け行くのも忘れて歓談、午後八時母校関西大学並びに秀麗會の方才を三唱、次面を期し名残を惜しみつつ散會した。出席者左の通り

宗田 義一 松吉 謙雄 小松 清
水谷 欽一 政井 武 栗林 章
池田 清英 青木泰良一 林 竹夫
荒木重太郎 松岡 展登 宮下 恭治
岩崎 猛 小野 氏郎 井崎 政器

泉南支部秋季總會開催

十月十三日午後三時より南海本線泉佐野駅前花仙樓に於て泉南支部秋季總會を開催した。大學側よりは阿部監事、安井校友課長出席、当日は折悪く天候其他に禍され参會者が少かつたが、阿部監事より母校の近況報告あり、宴に入つて次から次へと珍談、稀談も飛び出し和氣霽々裡に意義ある懇親の會を閉じたのは午後十時であつた。出席者左記の通り

松原庄雄、入江勇、藤田泰雄、多田一夫、中野勝和泉谷武、酒澤孝一

千里山昭八會開催

十月二十日午後二時より関西大学外苑に於て十月例會を開催した。当日は第二十二回大學祭の初日でもあり新顔も二、三來学、林間に紅葉を焚いて酒を温めるには少し早過ぎたが大いに飲を盡し久し振りに大學祭の雰囲気を感じ込んだ。小雨降る中を学生達と学生歌を高唱し乍ら歸途に就いた。当日の出席者左の通り

大田明太郎 堤 正徳 末本 宣一
毛利 義範 古下 展雄 山川 孝
金本 明一 神保 敏男 藤原 一馬
村尾 益次 岸田 敏次 佐藤 壽幸
道元直一 島田 繁 岡辻 詮
小西 善一 市道 正雄 前田 泰三
福山 昭 中川 一雄 齋藤 善三
吉田 二郎 松本 実造 片岡 正治
東 史郎 三浦 敏一 出口 政次
栗駒 正和 富本 正義 廣田 和彰
藤本孝治郎 徐之原仁助

千里山昭六會開催

昭六會も終戦後回を重ねること数次、今年には懐しい千里山を築立つて二十二年に當るので、十月二十七日夕六時より赤い灯青い灯の道頓堀畔森永に在販者相集うて想を新たにした。卒業後初めて顔を見せるものもあつて、嘗ての紅顔の青年も今や会社の重役、いかめしい署長、局長さては商店主、辯護士、教授等におさまつて一寸戸迷いする恰好、定刻福原氏の開会の挨拶に始まり、次いで八島氏の母校近況報告に一同耳を傾け、充実し、成長して行く千陵の姿を繪に描いて校運の隆昌を祈つた。府會開會中の偽関係の同窓数氏の顔の見えないのが些か淋しい。自己紹介、職域自慢を織込んで杯を重ねるにつれて昔とつた杵柄の書生氣質が丸出しになつて懐旧の情一入であつた逍遙歌のメロディもなか／＼しつかりとして居て、白線時代をそぞろに偲ばせ、三三三拍子のリズムも若人に負けない鮮やかさである。名残り盡きぬ儘に學歌を高らかに齊唱して母校の発展を祈り再會を約して散會した。出席者二十三名次の如し

山尾義泰、賀本敬英、若林秋一、廣瀬義雄、中山謙一、稻垣三郎、木下忠夫、大島武夫、廣田信平井三男、荒川虎一郎

羽瀧博、羽生忠、中辻尊、楠井文雄、石賀次郎
吉川敬一、内田文三、川西武治、執印正徳、瀧澤文和、八島治一、清水安義、福原清治郎、長尾昇、三谷久雄、藤井兵衛、西口權四郎、後藤

幸重、岡部俊吾、中辻裕幸、森多由造、小西頼人、佐伯三郎

◎ホツケー部 前号予想通り秋季リーグも全勝、連年通り春秋二季シーズン不敗を誇ることが出来た。前号記載後の成績は次の通り

本学 12 (710) 0 京大
昨年は挙行されなかつた全日本学生選手権が本年は行われるので、東京の勝者決定を待つて、東京で挙行される覇者戦にのぞむことになつてゐる。

◎サツカ部 野球、籠球、ホツケーに繼いで、秋のリーグの優勝を期待されるのは、当競球部であろう。野球、籠球の関々戦が白熱の試合を展開するよう

に、この競技も恐らく関々戦は白熱し、殊にリーグ優勝決定戦になるであろうことは間違いない。それ程この競技の関々戦も熱の入つた見応えのする白眉の一戦である。春季トーナメントに涙を吞んだオフ・サイドの判定に優勝を逃したとは云え、決して勝てぬ試合ではない。十一月三日より秋季リーグの幕が開かれるが、優勝決定戦となるであろう関々戦は最終日十二月二日に西宮球技場で挙行される、学友諸君の応援が望ましい。

◎フエンシング部 國体団体出場に大阪代表として出場した当部は、ホイルに第三位、エツペに第四位の成績を残し、表彰されて歸つた。

学生



大學祭アーチ

○大學祭 学友会最大の年中行事である秋の大學祭は、二十二年の歴史と傳統に、今日では大阪吹田兩市民は勿論、大阪近郊の最大行事として親しまれているが、本年は特に本学創立六十五週年紀念事業として、春の文化祭、学研祭、初秋を飾った白鷺美術展と、一貫して採りあげ、この行事を意義あらしめるべく、附属第一中學、第一高等學校、一部、二部短期大學を加え、第一部学友会が主催、第三部学友会が協同、例年にない張切り方であつたが、不幸にして、第一日は、午前中曇一つない大學祭晴れに、初夏を想わせる秋には、めづらしい暑い日射しも、午後は俄に曇り始め、晴天続きで電力危機とさえ云われていたのに、撰りに撰つて、この日が雨に変わる不運さに、週末の午後の來場者の足を止めてしまつた。第二日、日曜日、午前十時頃までぐずつた雨もよいの天氣で折角張切つた学友会委員の氣をませたが、午後は漸く秋碧天を見せる大學祭日和となり、

続々と來場者が詰めかけ、約二万の來觀者に、大學祭の行事も漸く熱が入り、第一日の淋しさを取戻すことが出來た。

第一日 執行委員長、体育部長、中島巖の開會宣言に大会の幕が切つて落され、フィールドでは、軟式野球學内決勝大会が、軟式野球部員の解説で行われ、一方、トラックでは、スキー部招待駅傳、同志社大对本學スキー部員によつてスタートが切られた。続いてトラックでは、本春より新しく出發した、関西學連自轉車競技連盟に参加した自轉車競技部による、自轉車競技種目紹介、部内レースが行われた、ともすれば競輪と間違れ易い本競技の紹介と認識に非常に役立つたであらうと思われる。団体追抜、ボイント・レース、ミス・アンド・アウトレースなど好評を博した。続いて、午後一時より、祝賀式を挙行、山田学生部長の挨拶、學長の祝辭、大石後援会長の祝辭が終つて、學内陸上競技、各部対抗リレー、教職員タバコ火付競争など行われる頃から、急に曇り始めた空から、細い秋雨が漸く潤しく降り出し、終に校舎外の催しを中止した。其の他、グラウンド外での催しとしては、排球コートで、本学対立命大の定期戦が行われ、接戦の末、本学が優勝し、続いて學内優勝試合が行われ、体育館前広場では、レスリング招待試合、拳法學内試合、相撲學内試合等が行われ、体育館内では、バドミントン部の

開學大招待試合が行われた。軟式庭球コートでは、府下優秀高校対抗試合が舉行された。一方、校舎内では、文化、学研各部のデコレーションが飾られ多大の好評を博した。映画研究部による、名映画スチール展、写真部による中央大學交歓写真展、美術部の美術展、即席スケッチ会、ユネスコ研究部の啓蒙展、経済研究部の貿易展、二部学友会の平和文学展、二部演劇部の演劇展、体育各部の輝しい勝利の記録を、す数々の優勝旗、杯、楯など、來觀者の足を留るに充分であつた千里山法律学会の無料法律相談所及び家島実態調査報告展、ソ研部のソヴェート文化展は、豊富な写真資料を美しく列べていた。文化館では、学友会主催の原爆展を開催、原子分裂の化学的説明、核分裂による医学的、物理的被害、將來に於ける平和産業部門への利用價值、發明に寄與した科学者の功績等、科学的な説明展示は、今日の問題に觀衆の注目を聚めた。経済商會講堂では、短大ハワイアンバンドによる輕音楽、雄辯會による學内雄辯大会、誦曲部による仕舞、學術研究部による學術講演会など舉行された。

第二日 前夜來の雨でグラウンド・コンデションの悪い中に、附属第一中學校生全員の組立体操、ラヂオ体操等が行われ、続いて附属第一高校の組立体操等が行われた。アメリカンフットボールの學内試合が泥濘のグラウンドに男性的な攻防戦を展開している間に、トラックでは學内各部によるマラソン選手の出発があり、アメリカン・フットボールが終る頃、馬術部員の勇姿が、グラウンドに現われ、本學馬術部の偉容に觀衆の目を見張らせた。設置された十障害飛越え競技がOB対抗で舉行せられ、乗馬十頭が、グラウンドせましと馳け廻り、障害飛越の妙技に拍手鳴りも止まず。この頃から、陸統と大學前通りを人の波が校門に続く、バザー賣店の客呼ぶ声も賑やかである。演劇部による野外劇の映画ロケーション風景は、瀟灑の人氣を搔き払い、場内整理に困る程の人数であり、続いて本學体育三十一部の堂々の行進が、数々の輝やかしい戦績を語る優勝旗、杯等を捧げ入場する。陸上競技部員の手に一際燦然と輝く秩父宮杯に万雷の拍手が湧く。当日秋季リーグに優勝したホッケー部が試合を終つて、このスポーツ行進に参加の爲、試合場から駆けつけ、入場する。全体育三十一部の整列を終ると、体育部長、現役功勞者の表彰式が行われた。その後は、各部対抗リレー、ムカデ競争に瀟灑を笑わせ、続いて体操部による器械体操は、平行棒、鉄棒と、肝を奪う妙技に、瀟灑の声を吞ませた。女子平行棒の美しいフォーム、男子鉄棒のスリル、誰一人去る者もなく觀衆を充分に魅了した終つて府下高校八百米対抗リレー、來賓教職員スプリンレース、借物競争等が行われ



た。二部幹事会对抗リレーに就いて、応援団総員の入場、一部二部短大一部二部全員の応援歌、応援拍手が行われ、次に仮装コンクールが満場の哄笑を買った。最後にファイヤーストームの火が燃々と千里丘上に点じられ、秋の短い陽足が西に傾き、暮色漸く迫らんとする頃、経商学舎講堂では、昨日に引続き数々の文化、学研部の催しものが繰げられていたが、時間のズレから閉会が遅れ、グリークラブ員の合唱、学部、短大合同器音楽会の妙なるリズムが二日間に亘る大音楽祭の終幕を飾った。

この日、邦楽部による邦楽演奏、二部グリークラブの合唱、討論研究部による討論会、更に又、吹田市長杯争奪、全日

本学生優勝雄辯大会が「講和後の日本」と云う課題の下に、遠くは北海道を始め全國各大学の参加を得て開催されたことは特筆されるべきであらう。

斯くして多彩な青春絵巻である大学祭は有意義に終了した。

猶、十月二十五日午後五時より映画研究部により大手前会館で大学祭の一環行事として「本学の記録」映画を観る会が催された。

西宮	4人	対	2	立命館大学	〃	西宮
〃	5	対	1	〃	〃	〃
〃	5	対	2	〃	〃	〃
〃	5	対	1	同志社大学	衣笠	〃
〃	6	対	3	〃	〃	〃
〃	8	対	0	京都大学	〃	西宮
〃	10	対	0	〃	〃	〃

猶、対京大一回戦は網の好投に一安打、
 二回戦は山村により今シーズン始めての
 ノーヒット・ノーラン試合であつた。

して東軍の勝つところとなつたが、翌二十一日の個人戦には、一ノ瀬は堂々三回戦に慶応大の蕉切三段を破り、準々決勝に本大会の個人優勝者金子五段に破れた。然し彼の技と業に就いては、「劍を持たぬ佐々木小次郎」と批評せられていることに依つても知られる。

〃	〃	〃	関大
65	87	76	65
(3431)	(3849)	(4234)	(3629)
(1723)	(3724)	(2928)	(2637)
40	61	57	63
〃	同大	〃	京大

●野球部　打撃面の好調は、投手陣をカバーし緒戦以來好調に勝進んで來たがそれに従つて、網投手の健闘も賞すべきであらう、幸い山村の不調を、田畑で補うと云う幸運も、田畑が練習中に足部骨骨折に、一抹の不安を残したが幸い、山村が次第に彼本來の調子を取戻して吳て、この不安も解消することが出來た。その著例は対京大戦のノーヒット・ノーランゲームとして現れたことであり、余す対関學戦には、網と、山村の両好調者により必ずや、完全優勝が実現されるのではないかと大きな期待を懸られるようになった。控えには新人上田の癖のある投球があり心強く、本誌が発行される頃には、全日本學生王座決定戦が舉行せられて居るであらう。十月五、六日に控えた対関學戦を残し、過去八戦の成績は次の通りである。

○柔道部 十月二十、二十一日の兩日
大阪球場に於いて、第三回學生東西對抗
柔道試合が舉行され、本學から、野見山
二段、堀田二段、富士原三段、一ノ瀬三
段が出場、兩軍それぞれ三十名の出場、
本學一ノ瀬三段の健闘も密しく五人を残

あつた当部は十月二十一日より第一回金
近畿大学大会（出場校卅一校）に出場、
第一回戦に佛教大を11対2で破り、第二
回戦、甲南大に9対2の大差で勝ち、準
々決勝には同大と1対1のまゝ引分け再
試合の結果、惜くも2対0の接戦の末敗
れた。（七頁に続く）

海外學界談柄

最近海外の知友が私に寄せた通信の中から大学、学会等に関する二三の報道を摘載して読者の参考に資する。

一、J・M・クラーク 米コロンビア

大学教授で父J・B・クラークと同じく二代続いて経済学の講座を担当して居る學者で最近主として失業問題を取扱つて居る、國際連合の委嘱により五大専門家との共編にかかる一九四九年公刊「完全雇傭と賃銀」は有名であり、その統編として「完全雇傭政策」が正に出版されんとして居る。クラーク教授への私の通信は時には英語時には佛語又時としては一部は英語一部は佛語マゼコセのことあるので教授も亦之と同調してくれるのが常であるがこれは親しみであり愛嬌であり更には儀礼とさへ思はれて欣快である、現に本年十月四日附教授の書信の前半は佛語であり後半英語に書き移る文句に「此上佛語を頭の中で探すのは面倒であるから以下英語にかへる」とあるのは極めてフランクでその人格の一端が

窺はれる。同書中に私学経営の困難に同儕し日本の將來にはその困難よりヨリ大なる困難が横はつて居ることを示



クラーク家の三人

な避暑地タロワールで開かれた國際經濟協會 (International Economic Association) 一九五〇年九月創立) の総会に出席して一場の講演をした、各國から經濟學者が集まつて來た、佛國のエミール・ジャーム(貴下の旧知シヤルル・リストは不参)を首め若き教授等、英國のロビンソン、ハロッド、ギルボード等、瑞典のミルダール、白國のデ

ウブリーツ等

である、この会は學者間に於ける意見交換の有益な機会であるから次会からは日本参加を切望する。

尙同書中に家庭の話があるがそれは誠に面白くもあり同時に又教へられるところが少なくないのでここに之を紹介する。長男ジョンはハーヴァード大学の研究所で教授のアシスタントを勤めながら古生物學を専攻し、ドクター試験は既に終了唯論文のみが残つて居る、ジョン二兒子は家計上の必要もあり今夏は暑熱も

唆し又今やアメリカも數多の難問題に直面し殊に全世界と協力して成るべく速かに解決しなければならぬ安全保障の大問題等々枚舉に遑あらずとありなほ次のやうに筆を進めて居る。

余は去月デューネーヴを距る五十キロ、佛國アンシー湖畔に在る風光明朗

暇はザアイスクリーム・トラックを運轉してチリン／＼とアイスクリームを賣り歩き毎日十二時間働いた、遂に彼は一軒の家を買ふ事が出来た、尤もそれは父からの多少の補助と住宅金融公庫の融資を受けた、地代家賃のドン

ドン昂騰する昨今アパートを借りるより經濟的であるのみならず住心地も非常によいので一家大満悦のことである。研究、労働共にその態度に吾人の學ぶべきところが少なくないであらう。次男フランクは一時大學を休學して美術學校で絵を學んで居たが此度又大學に歸り佛文學を修めて居る、絵を學んだのは勉學の傍ら之を教へることによつて學資の一部を得る爲であると云ふ、別に不自由のない家庭でありながら研究と自立とを計畫的に並行させて行くところ蓋し読者の注意を惹くであらう。

クラーク教授は目下經濟動員並に經濟生活に対するキリスト教の態度の問題の研究に専念し他方大學ではドクター論文の指導に當つて居る。

尙教授はかう云つて居る、私は經濟學全般に亘る問題に関し私が敢て「理論」と思ふところのものを書かうとして居る——それは多くの理論經濟學者が從來理論又は原理と考へてをつ

たものとは恐らく異なるところのもの。
最古稀になりなんとして学の志いよ
／＼旺、吾人私かに省て慨然たるも
のがある。父ジョン・ベーツ・クラ
ーク教授は九十一歳の長壽を保ちアメリ
カでは比較的少ない理論経済学者とし
て終始した、私はこの老教授とも二十
年の長い交遊があつたからクラーク家
とは実に二代に亘る交遊である。

挿入の写真はクラーク家の人々で
ある、一九三六年撮影のもので古す
ぎる感みはあるが、同家三代を一時
に示すので、まことに珍らしいから
ここに載せることにした。時に父 J
・B・クラークは八十九歳、息 J
・M・クラークは五十二歳、孫ジョン
ベーツとフランク・ジャスタスとの
年齢は詳かでない。

二、ルネ・カピタン フランスの大法
学者故アンリ・カピタンの息として立
派な教育を受け、一九二九年ストラス
ブル大学教授に任ず（本誌第二三四
号中「パリ大学談話」参照）。元來政
治好きで専ら金融政策を研究、ミュー
ンヘン三巨頭会議後は密然起つて反ナチ
ス運動を指導し、天幕の熱難辯を振
ふ。一九三九年応召、陣中にて偶々
・ゴール將軍と相識り政治的に深く共
鳴した。翌年休職と同時に復員、所謂

「抵抗運動」(Résistance) に参戦し
ド・ゴール將軍を中心としての同志を
糾合した。一九四一年依願アルジェ大
學に轉任、法制史の講座を担当、そこ
で反ワイシー活動に自由を得、北ア
フリカ開放運動の主役を勤めた。一九四
三年二月ワイシー政府は反國家運動の
主義者として彼を罷免した。一九四四
年ド・ゴール假政府の文部大臣に任じ
「文部省の独善教育から全國民の教育
へ」てふ學制の大革新を計畫した。其
後ド・ゴール將軍が現在のフランス國
民連合 (R.P.F. = Rassemblement du
Peuple Français) を組織するやその
黨員としてパリ地区の代議士に當選、
同黨幹部の柱石をなし今日に至つた。
今ここにルネ君（私は彼を學生時代か
ら能く知つて居るからかく呼びたい）
その母並びに義弟トロタバ教授より最
近受取つた通信の中から興味ある一二
の談話を拾録して見よう。
ルネ君は本年六月の總選舉に際し勿
論立候補した、しかしそれは當選確率
の地盤たるパリからではなく党勢拡張
のため、未だ R・P・F・の地盤でな
いイゼール縣から自信満々敢て出馬し
た、その勇氣その雄辯も効なく惜くも
敗れた（しかし R・P・F・は百十五
席を得て第一党となつたが複雑な政情

下政權を握るに至らない、同黨は下院
で最右翼である）。そこでルネ君は同
學の勧めに依り再び學界の人となつ
た。即ち恰もパリ法科大学に一室席あ
るを幸ひ教授会大多數の賛同を得、競
争者を敗つて教授の椅子をかち得た、
一旦教壇を去つて政治家となつた者が
教授の椅子に復帰するの例は——少な
くともパリ法科大学では——極めて稀
有に属すると云ふ、ルネ君の場合は父
君の遺徳と又同君に対する同僚の個人
的同情とによるものと思はれる。その
競争者と云ふのは急進社會黨黨員とし
て立候補し是亦落選したポール・バス
テッドである、同氏は國際裁判所所長
バードザンの女婿、元リヨン大学教
授、前代議士であり、同夫人はパリ法
科大学の教授である。尙ルネ君は政治
と全く絶縁したのでなく今なほ R・P
・F・の重要な委員会委員長であり政
治、學問の両刀を使ひ如何にも忙し
うである。之を認容するパリ法科大学
の度量また広しと云ふべきであらう。
今夏ニース法學研究所（本誌第二四
〇号参照）でその所長トロタバ教授の
肝煎りて醫師に關する國際規約起草準
備のために國際法醫學會が開かれた、
尙同計畫遂行のためモナコに常設の本
部が設けられるとのことである。

その詳細は同教授に依つてダロズ法
令集彙報一九五一年第二五号に報せら
れて居る。いづれ本誌にもこれを紹介
する機会があるであらう。
マチス展が先般東京と大阪とで開か
れ美術愛好家をよろこばしたことは読
者の記憶に新であるであらう。その出
品は主として南佛の一小部ヴァンスに
在るサン・ドミニック派修道院禮拜堂
のデッサンであつた、マチスが十年前
賜の手簡で入院し生命危しと云はれた
が若い看護婦の献身的な看護のお蔭で
九死に一生を得た、この看護婦はその
後尼僧となり前記ヴァンスの修道院に
入るや禮拜堂の建立を企て、元來画道
に心得のある彼女はすべて自分のデッ
サンに依らうとし、その下絵をマチス
に見せた。そこでマチスは報恩はこの
時ばかりと、自ら進んでその建設裝飾
等一切を自費で引受け本年七月竣成し
た。トロタバ教授とその姑カピタン宋
亡人とが恰もこのヴァンスに住んで居
る、ヴァンス禮拜堂について各小評を
次のやうに書いてゐるがなか／＼に面
白い。
トロタバ教授は「ヴァンスの禮拜堂
もいよ／＼出来上り日々見物に集まる
老若男女引きもきらず何しろ大変な盛
況である」（以下一五頁へ）

河豚談義

鑄方貞亮

向來の鰐をぞろに食いたくなるものは河豚である。性來、飲慾は兎も角、食慾にかけて潔癖なことは自他共に相許している筆者、決して河豚を肴にしようななどとは思っていない。夜な夜な味噌、梅干の類で結構酒を樂んでいる証拠がある。昨、廿五日の朝日・青鋒筆欄は、福岡をたつ日航機上り一着機上り一番機の前客として河豚三貫目が下関から乗り込むが、その運賃しめて二千五百円也と報じている。全く驚き入つた話で、これでは、河豚は食いたし金は無し。みみづちい泣言を言わざるを得まい。

さて、こゝで書こうとするのは現実の河豚ではない。胃腸を患つてゐる小供が、過去に食つた美味いものを追憶するように、今は手が届きそうも無い河豚の食味を反芻しようと云うのである。

先づフグと云う名について、新井白石は「フグとは即ち其の腹脹れあるをいひ、フクベ（フグの別名）とは、水上浮び出づる事の鰻瓜に似たるを云ひしと見えたり、膜、読みてハルといふは張也、俗にフクルといふは、もとこれ鰻地の方言に出づ、即ちこれ鹽の字の轉音と見えたり、即ち今も方言これに似たり、鹽腹をばハラフクル并いふ如きも此の義也、鰻鰻をフグといひ、鰻瓜をフクベといふ、並に同じ、即ち是れ河豚魚と見えし者なり」（東雅）と述べ、フクルル（フグ）と云ふも、その名の由來であると説く。谷川士清も「和

名鈔に鰻鰻をよみ、常に河豚をよめり、ふくれたる魚也、古はふくべといひ、西国四国にてふくと、ともいへり」和訓栞として、ふくれることに關係づけている。更に、俳人越谷晋山は「京江戸ともにふくとよぶ、西国及び四国にてふくと、と云ふ、又江戸にて異名をてつばうと云ふ、其の故はあたると急死すと云ふ意也」（物類称呼）と云い、武井周作は「下総銚子の俗とみといふ、これは江戸にてつばうといふと同意なり」と解しているが、河豚を富饒にかけたところ、如何にも下総の筈は當つたと観る。現在でこそ、テツナベ、テツチリ等と愛称されているが、曾ては決して上品な言葉では無かつた。「江戸の卑賤の者、河豚を鰻鰻といふは、あたれば即ち命を失ふとの意なるべし」（梅園日記）北條吾は喝破している。

河豚の形態、性狀は読者先刻御承知の通り、今更説明無用と存するが、士清は「凡そ魚品に目を動かすは河豚のみ也、鰻魚たる知りぬべし」（和訓栞）といひ、みつけている。敢て魚類のみとは申すまい。人間でも兎角眼の定まらぬは悪人の相、腹中毒を蔵すると見て差支えない。

愈々これから河豚の食味にうつる。昨年か河豚料理人は河豚料理試験合格者に限られることになつたが、河豚の生毒は卵巣に、次いで肝臓・胃・腸・睾丸・精子（白子）等に在る。本朝食鑑に云う。「肉白くし

て脂つかず、味淡にして最美、大骨の両辺に赤血肉有り、煮炙すれば則ち黒に變ず、腹・腰にして最も美なり、古人西施乳と爲すと雖も、而かも腹中に毒有り、故に之を避けて食はず、凡そ腸胃俱に毒有り、就中、腸胃の後大骨の傍に胡蝶の形の如き者有り、而して青白色、味亦甘し、若し誤つて之を食へば、則ち忽ち人を殺す、猫犬も亦之を食へば則ち乍も斃る、故に生きながら魚腹を割きて之を来る。然れども鰻尚死せず、水に投ずるに動くが如し、此の物古人未だ之を知らざりしか、一言の論無し、是れ河豚の毒たるの最たるもの也、（中略）今厄人、腹腹腸胃及び蝶子の類を去りて之を煮れば、百に一死無し、」著者平野必大は流石に医者である。科学的な実験を根拠として河豚の美味と毒とを論じている点が頼得しい。さて、西施乳とは何であらう。字典によれば、「河豚の腹中の白きところ、味最も甘肥、吳人甚だ之を珍とす」とあるが、西施はこの春、宝塚で人氣を呼んだあの西施であつて、越王勾踐が吳王夫差に贈つた絶世の美人である。蓋し、美女の乳に根源した名称か。とは云え、美女の乳が然らざるものの乳に比し、果して美味であるか否か、敢て筆者の関焉するところでは無い。既に「夫れ西施は一美婦也、豈に乳も亦人に異るべけんや」（鰻畔録）と大見得を切つた先学もあることだ。如何に料理法を説いても矢張りそれを試みる人は少なかつたらしい。まともな人は食わなかつた。「総て毒魚と知りて食するは、命を知るものにあらず、孟子曰く、飲食之人は皆之を賤むと、慎む可し戒む可し」（尾張志）全く御説の通り。「河豚汁や鰻もあるのに無分別」、芭蕉翁も亦かく論ず。ところが一度味を占めるとなか／＼やめられないのが河豚である。「ふぐ汁に幾度嘗ひ破りけん」誘われる度にだらしなく引きずられて行

くところに河豚の魅力がある。

河豚料理は、刺身、チリ鍋、味噌汁に止めをさす。も一つ鰻酒を忘れてはなるまい。曾て筆者は神戸のある料理屋で河豚の庖丁方を見学したが、そのソツのないのに感嘆之を久くした。先づ背鰭・胸鰭・尻鰭・尾鰭等を（腹鰭は無い）切り落すが、これは鰻酒の材料にとつておく。次に脇腹を少し切り尾の方から皮を逆剥ぎにする。見事につるりと剥ぎとつたんだら、皮は刺身のつまやちり鍋の用意にとつておく。更に鰹を掻き取り頭を切り離すが、捨て去るものは僅かに眼玉と鰹だけであつた。戦時中、筆者はこの觀察を大いに役立てたものである。配給魚の中に名古屋河豚が屢々混入していたが、酒飲みの筆者を知っている魚屋氏はその都度わざ／＼持参して呉れた。実演したのは流しの隅であつたが幸にして一度も中毒したことは無い。先輩の医者からアルコールを譲り受け、一人で飲みつゝ飽食した時の痛みは絶大なもの、正に戦時中の圧巻であつた。鰹買で余所のながしへ持てゆき」たのしみな事／＼。鬼子母神的なところははいやらしいが実によく判る川柳だ。女房に叱られる叱られぬ兎も角、自分一人で責任をとるところに父性愛がある。流石に小供達には食はせなかつた。

昔からお隣のシナと我国とは極めて密接な間柄にあるが、こゝに一つ面白い話がある。

「河豚方に出る時、一尾の直千錢、然れども多く得ず、富人大買、預め金を以て漁人に、徹すに非んば未だ致し易からず、二月後日、益々多く一尾わづかに百錢のみと。今江戸にてかつをを買ふと同じ、松陰快談に云はく、東都の人松魚を嗜む、其の出づるや春末初夏に在り、始めて出づるとき一尾の直万錢、都人争ひて之を買ふ、中下之戸、最も先に之を食ふ、晩く

食ふを以て恥と爲し、襖を傾け衣を典し（質におく）惟得ざることを熟るゝ也、四五月之際に至れば、出ること益々多く、一尾僅かに百錢のみ、（中略）是れ彼此相似たるは、河豚は毒有り、往々人を殺す、松魚も亦微毒有り、其の鮮ならざる者は、能く人を中傷す、鮮なる者も亦多食に宜からざる也、按ずるに、爾雅翼に、鰻は今の河豚、其の出づるや時有り、率れ多至の後を以て来る、毎に三頭相従ふ、號けて一部と爲す、諺に曰く、一部を得るに一榜を典す」（梅田日記）

淡々と叙べたところに北慣言の品があると見たのは筆者の癖目か。あまり解釈とか方法とか理論とか言わぬ方がよいと存するが如何。さて、江戸の鰻にシナの河豚、いづれにしても食いたい心理は御同様。女房を質に置いても飲みたいものは酒であり、ズボンを買に入れても食いたいものは河豚である。この点、河豚に人道上の正しさを認めたい。河豚の味を知つてしまえば、もうそれまで、毒などまるで問題ではなかつた。

「たとへば鰻は、大毒としらぬものもないに、ナンノ鰻が毒であらうぞ、鰻管の市で煮賣まで喰ふたが、終にあつた事が無いといふ様な物、人がらなもの、万事に慎みが深きゆゑ、むざと毒なものを家内へもいれず、煮賣の鰻でもしてやる輩は、教訓異見は馬鹿の口癖、毒立ては腰ぬけのする事と呑み込んで居れば、いかさま其の筈の事。」（当世社説）もうこうなつては手がつけられない。遅い限りである。ところが、人がらなものも亦この美味い河豚には口をつけざるを得なかつた。「今の世にはやる、河豚汁は、毒のころみ地ごくの上の一足とびなれど、くらゐたかき人々も道乱なくなりて、おほくきこしめす」（塘忍記）西瓜、鰻、甘藷なども最初は下賤のものの食ひ物、人柄なものはきこしめさなかつたのである。それにしても河豚

の魅力ほど空恐しいものは無い。不幸にして中毒したらどうなるか。云わずと知れた地獄行き。恥かしながら、筆者も十数年前、安物の河豚を食ひ夜中手足が痺れた経験がある。当時健康保険が無いのを幸、風邪薬と称しては食つていた河豚であるが、いざ完全に中毒してしまえば左の通り。『千日寺の前、往來のかたはらには、種々の墓あり、河豚をくらひて死したる四人のもの墓は、下に石にて大なる河豚のかたちを彫刻しその上に碑石を建て、四人の戒名をしるしたり、これらは一時の戯に似たれど、後人口腹を貪るのいましめにもなるべし』（堀旅漫録）こんなことで名を後世に挙げては決して孝の終りとは申せまい。

それなら河豚中毒の妙薬は無いものか。鹽汁、鰹、青砥汁、黒砂糖、檀麝等が救えられるが、最も効果あるものは人糞である。松浦清は言ふ。「人糞は解毒の妙あり、先年予が領内にて三人密合河豚を食ひ、皆其の毒に中り頓悶昏乱す、一人曰く、糞を食せば生んと二人曰く、たとひ死すとも不潔の物食ふべからずとて、食せざりし者遂に死す、一人忍びて喰ひければ、血を下すこと夥くして尋いで癒ゆ、去れども余人皆糞喰ひと呼びてこれと交らず、因つて里に居ること能はず、遂に他邦に行けり、」（甲子夜話）命長ければ恥多しの御本尊、兼好法師の御高説を承りたいのは蓋し筆者一人か。糞喰ひと呼ばれたとてそう恥じ入るには及ぶまい。人の糞も七十五日、赤ん坊の頃自分の糞小便を口にした連中は可成る筈だ。糞を食つても生き抜こうとするその勇氣こそ頼母しい。右の悲劇に反し、著者は次のような和氣な話を述べている。『江都神田に夫婦の者あり、其の夫常に酒を好み毎に過酒す、婦是を憂ふ。或ひと曰く、糞汁解毒に妙あり

趣味の頁

関大歌壇

折々に

飯田正一

胸張りて歩まむとする氣負ひさへ失せにし如きわれと思はむ

アカシヤの匂ひこもれるゆふぐれの坂登りゆく夜学生の群

映画など十年あまりも見ぬ妻にはどかるごとくわれは見にゆく

北支より引揚げし友の遺族にも会はむといひて幾月か経つ

静かにも午後の日ひかり冬山が近々と澄むビルの間に

構内の楓芽ぶけど電車待つ人は多くも目にとめざらむ

冬山に対して坐り三階の研究室にひとり籠もらふ

(文芸部教授)

関大俳壇

露踏んで蓮の開くを聞きみたり

木下青一路

路次深く秋霖の灯の明滅す

大川 双舟

満々と満月の下汐満てり

小林 昶

やゝ寒み銀杏に月の傾ける

植村久太路

しつとりと衣袂のしめり肩並めて

宮崎 蕪吉

月天心川洲に舟を降りにけり

阿久根砂村

秋の水受けて米搗く音澄みぬ

滝川 仙月

はぶ草の実がちになりて露しとゞ

中村 桔木

白菊の一本は地に俯し咲ける

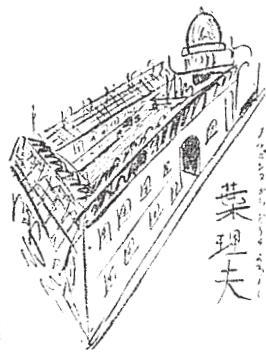
西浦 義一

四季咲の三度目の薔薇露にぬれ

富永富竹雨

エリセーフ氏の横顔

十月十日來學したザアティム・エリセーフ氏はこれまで東京日佛會館々長を勤め、此度任滿ちてアメリカ經由で帰佛することになり其途次本學を訪れたのである。氏はまた東洋考古學の研究家で譜日中主として日本の銅器に就て研鑽を積み、各地の發掘に参加しなほ先般の對馬考古學發掘隊にも加はつてゐる。同氏の父君セルジュ・エリセーフ氏は元來ロシア人であり、我が東京大學を本學教授石濱純太郎氏らと共に卒業し、日本文學、漢學に精通し日本語をも流暢に語る日本通である。



エリセーフ氏の毛筆墨繪

革命に依つて第一次大戰後フランスに亡命して遂にフランスに歸化一九三七年米國ハーパード

大學より教授に招聘され、同大學東洋學術研究所々長として今日に至つてゐる米國切つての東洋通である。即ち父子揃つての東洋研究者で、ザアティム氏も亦日本語を巧みに話し些かも尙ふ所なく、日本語に対しては日本語、佛語には佛語、英語には英語で答へるといふ愛嬌振りを發揮し、大学院研究室の建築を一室々々興深く眺め、「周囲の景色が美し過ぎて學生が勉強しないであらう」と諧謔を交へてスプレンドイッドの連發。懇談会の席上では其余技を示し、毛筆を輕くおしらつてソルボンヌ大學のデッサンを物してくれた。氏は帰佛の途アメリカ各地の博物館を遍歴し、來春二月フランスに到着の豫定で、歸國後はバリの國立セルニユツシ博物館長となる。(編輯部)

(十三頁より続く)

と聞く、婦惟へらく、吾が夫常に河豚を好む、若しその毒に中らば 廻ち用ひんと、其の夫一日酩酊して婦り人事を弁せず、頗る死者に類す、婦 廻ち河豚毒に中れりとしてその口に蜜汁を灌ぐ、夫半夜にして蘇るが如し、婦に謂つて曰く、我、今日某に於いて被酒陶酔す。然るに醒むることの早き意外なり、又、口内悪臭あり、いかにや、婦実を以て告ぐ、夫

大いに驚き且つ事の違へるを嘆ふ。(甲子夜話續篇) 正に夫婦美談とも称すべきである。飲助の夫を思ふ妻、又、妻に蜜汁を飲まされ、敢て一言の罵言も吐かず、阿々大笑した夫、男女同権の現代においてさえそうザラにある話では無い。浪花節の放逸ではないが、予定枚数に達したので欄外するが、さて皆さん、河豚を食いたいとお思ひになりませんか。(二六・一〇・二六) (編輯部教授・農學博士)

校友各位に望む

校友名簿作成準備の爲此際校友各位の詳しい消息を承りたいと存じます。何分戦時戦後を通じて校友各位との連絡も甚だ遺憾乍ら疎遠になつて居ります故至急左記要項に就き御手教乍ら御一報下され度く御願ひ致します。

- 尚名簿御希望の有無をもお知らせ下さい。(予價四〇〇円)
- 1、姓名(ふりがな附) 改姓名の場合は旧姓名併記の事
 - 2、生年月日
 - 3、本籍地
 - 4、現住所
 - 5、卒業年度部科別
 - 6、職業
 - 7、勤務先
 - 8、勤務先所在地

昭和二十六年十一月

大阪市大淀区長柄中通二丁目

関西大学 校友課

電話堀川(35) 二七六・三三三
二〇七・二七三

【編輯後記】

◇菊華薫り霜葉映ゆる晩秋となり、千里の丘阜を飾る最大の行事である大学祭も無事済み、街には早くも慌しい歳晚を想はせる大賣出しの幟旗の萬彩が賑はひ始めました。今年の大学祭当日一父兄が亡き子の遺骨筒を白木綿の布に包み、胸に抱いてグラウンド滑ひのアカシヤの坂道を次々に繰り出される学生の競技に目を遣り乍ら感慨深げに歩みを進めてをられる姿が心を拍ちました。

◇尚十月中旬より十一月上旬にかけては学会、講演会、名士來學など相次ぎ活氣を呈しました。また学生は中旬で前期試験を終了し、重苦しい空氣から解放され、あらゆる面に明るいいきびきびとした活動を示してゐます。

◇教授方は試験期の御多忙中を割いて當誌の爲に御寄稿下され、將來への躍進に大いなる力づけを與へて下された御寄稿の教授方に爰に謝意を表する次第であります。

◇當誌は紙價騰貴と闘つてあくまで定價維持を購読者諸氏の爲に計つて参りましたが、其他の諸物價の騰貴に抗し切れず、前月号より値上げの止むなきに至りました。十月以前に御申込みの方々に對しましては、今年度のみ從來通りの購読料のまゝで追加代金は頂戴致さないこととしました。但し一部分の方は昭和二十六年度購読料として三百円頂戴致しますから右御了承下さい。復刊第一号より第七号までの二十五年度分は二百円。(編輯部)

(十一頁より続く)

である、ステンダグラス以外すべての壁は眞白な角タイルに黒線で画いたデッサンと云ふ装様であつて、実に「奇」の一語につくる、ここに同封数枚の写真を貴覽に供する」と。又カピタン未亡人は「マチス礼拝堂?私の趣味から云ふと世界一の不出來、出來るまでの大評判、大騒ぎ実は大山鳴動眞一疋、一度あなたをそこに案内して御意見を聞いてみたいと思ふ程です」と。

三、ポール・クロードル この大詩人からの本學學生に宛てたメッセージが郵送中脱落したのでこのよしを詩人に傳へたところ、頗る厭はず更に一文を贈られた、別に之を掲げ絶大な厚意に對して深く感謝する(本誌二頁参照) T・M・生

関西大學學報 第二四四号 復刊一四号

定價三十円(送料四円)

一年誌代實收三〇〇円(送料共)

昭和二十六年十一月十日印刷
昭和二十六年十一月十五日發行

大阪市中 村 浩

大阪府北區川崎町七

印刷者 西 井 茂 藏

大阪府北區川崎町七

印刷所 株式 ナニワ印刷所

發行所 大阪府大淀区長柄中通二丁目
関西大学 學報局

電話堀川(35) 一七五・六六六
振替大阪二六七・七二二

關西大學圖書館新着洋書目錄 (Ⅸ)

Commerce.

- Clark, Fred E., and Clark, Carrie Paton: Principles of marketing. 3d ed. New York 1947.
- Paton, W. A.: Advanced accounting. New York 1950.
- Blocker, John G.: Cost accounting. 2d ed. New York 1948.
- Van Sickle, Clarence L.: Cost accounting; fundamentals and procedures. 2d ed. New York 1947.

Literature.

- Legouis, Emile, and Cazamian, Louis: A history of English literature. Tr. by. by Helen Douglas Irvine and W. D. MacInnes. Revised ed. London 1948.
- Wordsworth, William: The poetical works. Ed. from the manuscripts with textual and critical notes by E. de Selincourt and Helen Darbishire. Vol. 1-5. Oxford 1940-9.
- Butler, Samuel: Samuel Butler's notebooks; selections ed. by Geoffrey Keynes and Brian Hill. London 1951.
- Maugham, W. Somerset: A writer's notebook. London 1949.
- Kosch, Wilhelm: Deutsches Literatur-Lexikon; biographisches und bibliographisches Handbuch. 2. vollständig neubearbeitete und stark erweiterte Aufl. Bd. 1. Aachen—Hasenauer. Bern 1949.
- Spiero, Heinrich: Geschichte des deutschen Romans. Berlin 1950.
- Carossa, Hans: Gesammelte Werke in 2 Bänden. Bd. 1-2. Wiesbaden 1949.
- Bédier, Joseph, et Hazard, Paul: Littérature française. Nouvelle éd. refondue et augmentée sous la direction de Pierre Martino. Tome 1-2. Paris
- Lalou, René: Histoire de la littérature française contemporaine (de 1870 à nos jours) Tome 1-2. Paris 1947.
- Martin du Gard, Roger: Les Thibault. Tome 1-9. Paris 1949.

Philosophy.

- Anteile; Martin Heidegger zum 60. Geburtstag Frankfurt a. M. 1950.
- Creel, H. G.: Confucius; the man and the myth. London 1951.
- Jaspers, Karl: Allgemeine Psychopathologie. 5. Aufl. Berlin 1948.
- Jaspers, Karl: The perennial scope of philosophy. Tr. by Ralph Manheim. London 1950.
- Jeans, Sir James: Physics and philosophy. Cambridge 1948.

Politics. Law.

- UNESCO: Contemporary political science; a survey of methods, research and teaching Paris 1950.
- Fleisher, David: William Godwin; a study in liberalism. London 1951.
- Mannheim, Karl: Freedom, power and democratic planning; ed. by Hans Gerth and Ernest K. Bramstedt. London 1951.
- Americano, Jorge: The new foundation of international law New York 1947.
- David, René: Traité élémentaire de droit civil comparé. Paris 1950.
- Lacour, Léon: Précis de droit commercial. 9^e ed. Paris 1950.
- Mannheim, Hermann: Criminal justice and social reconstruction. London 1949.

Economics.

- Bye, Ramond T.: Social economy and the price system; an essay in welfare economics. New York 1950.
- Clemence, Richard V., and Doody, Francis S.: The Schumpeterian system. Cambridge, Mass. 1950.
- Schlesinger, Rudolf: Marx; his time and ours London 1950.
- Spann, Othmar: Die Haupttheorien der Volkswirtschaftslehre auf lehrgeschichtlicher Grundlage. 25., durchgesehene Aufl. Heidelberg 1949.
- Spiegel, Henry William: Current economic problems. Philadelphia 1949.
- Stigler, George J.: Five lectures on economic problems. London 1949.
- Tinbergen, Jan, and Polak, J. J.: The dynamics of business cycles; a study in economic fluctuations. London 1950.